

「核」は今も使われ続けています 柏木裕美

さる8月、原水爆禁止日本協議会(日本原水協)などが主催する原水爆禁止世界大会が開かれました。全国から6800名が集まり、また初めて国連の代表を迎え、あわせて34か国99名の海外代表も参加しました。

広島での大会に、北茨城・九条の会の若手メンバー柏木裕美さんが初参加しました。この代表派遣にあたっては例年どおり、市長や市議会議長からの募金をはじめ、市内のたくさんの個人・団体のみなさんの温かいご支援を寄せていただきました。柏木さんから届いた手記を紹介します。(写真は日本原水協のHPから)

ABCC

広島市街を眼下に望む山の上に放射線影響研究所があります。この施設は1947年(昭和22年)にABCC(原爆傷害調査委員会)



8月4日 広島県立総合体育館・グリーンアリーナ

として、アメリカ政府(原子力委員会)の資金によって設立された機関です。

設立目的は原爆放射線の被爆者に対する健康影響を長期的に調べる事であり、検査はすれども治療は全く

せず、施設で被爆者は検体として扱われ、多くの批判や反発のあつた施設で、名称、目的が変わつた今日でも、被爆者にとっては複雑な思いを抱えている人が少なくない施設です。

資料によると、この施設では今日、被爆実体験者だけでなく、その子ども、被爆二世の原爆放射線による後影響も調査、研究がおこなわれています。今のところ、被爆二世の人達に異常が増えたという結果は得られていないそうです。

この施設を始めとする原爆遺跡や関連施設を案内してくれた方は、父親が少年時代に被爆したという経験を持つ二世の方でした。この方は数年前に突然原因不明の中耳炎にかかり、医者に「二世」ではないかと指摘され、検査したところ、

甲状腺に異常がある事がわかったそうです。

放射線による影響は細胞や細胞内の遺伝子に及ぼされ、どの臓器や細胞にいつどんな形で発症するかなどは未だにはつきりとはわからないと、別な資料には記されています。被爆時に母親の胎内にいた子だけに影響が出るとは限らないのです。

劣化ウラン弾

広島、長崎への原爆投下から半世紀以上が経ち、公的に核実験が行われなくなつてから700日近く経つ今日、イラクやアフガンでは、小頭症や奇型、白血病やその他のガンで苦しむ子ども達が増えています。

原因はアメリカがアフガン・イラクに投下した劣化ウラン弾にあります。

劣化ウランは核燃料としての利用はできないが、鉄の2・5倍、鉛の1・7倍の比重があり、合金化され、主に対戦車用の砲弾・弾頭として使われている弾体だそうです。放射能は天然ウランよりは幾分低いそうですが、放射線を発している物質には変わらないのです。高温の熱線や爆風を発する



8月2~4日、広島厚生年金会館

原爆だけが核兵器とは限らないのです。

広島、長崎のように一度に多くの犠牲者や後遺症で苦しむ人達を生み出さないまでも、放射能に苦しめられている人達は今も増えているのです。

今日の日本は報道管制(プレスコード)があるわけでもないのに、何故もつとその事を伝えないのでしょうか。

イラクやアフガンで起きている事は対岸の火事であつて無関係なのでしょうか。

広島、長崎の祈りや願いの声は「その日」だけに思え

ば良い事でしょうか。

「ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ・ノーモアウオー(戦争)」は日本だけの願いではない事を知ってください。血で血を洗う戦いに何ら生み出されるものなど決してなく、戦いが終わったとしても、後に残るのは数多くの犠牲と愛する家族を失つた遺族の怒りと悲しみだけだと、どうか忘れないでください。63年前に核兵器が初めて日本に投下され、今もなおその後遺症で苦しんでいる人達が数多くいる事を。